令和６年度入学式学長式辞（2024.04.06）

新入生のみなさん。入学おめでとうございます。鳥取大学を代表して、みなさんの入学をこころよりお祝いし歓迎いたします。４年前に始まった新型コロナウィルス感染症のパンデミックがやっと収束してきた一方で、ロシアによるウクライナ侵攻は中々出口が見えてきません。その上、パレスチナ自治区ガザで、イスラエルとハマスとの紛争が起こり、いまだ続いております。この１月には能登半島地震が起きました。このように国内外で様々な出来事がめまぐるしく起こっている中で、新入生が一堂に会しての入学式がこのように挙行できますことを、鳥取大学として本当に嬉しく思っております。

鳥取大学は昭和２４年に、鳥取師範学校、鳥取農林専門学校、米子医科大学などを前身校として新制国立大学としてスタートし、今年、７５周年を迎えます。前身校の時代から現在まで、実学を重視して、地域社会が直面する課題に果敢に取り組み、人びとの生活の向上と産業の育成を通して、地域に貢献して参りました。同時に、地域の課題解決を探求する中から、人類にとって役に立つ、普遍的な知識を見出して、広く世界に発信し、学問の発展はもとより世界の平和や福祉にも大きく寄与してきました。鳥取大学の基本理念「知と実践の融合」、すなわち、実践を通して知識を深め理論を身につけ、地域から国際社会まで広く社会に貢献するという理念は、こういった鳥取大学の歴史の中から生まれ、これから、みなさんはこの理念のもとで学生生活を送ることになります。

さて、ノーベル生理学・医学賞のこの２年間の受賞内容を見ますと研究の多面性、多様性が良くわかるので少し紹介したいと思います。2022 年の生理学・医学賞は、スエーデン出身のスバンテ・ペーボ博士の「絶滅したヒト族のゲノムと人類の進化に関する発見」に対し

て与えられました。「人類はどこから来たのか、いかにして現在の人類へと進化してきたのか」という問題については、これまでさまざまな研究が行われてきました。ペーボ博士は分子生物学の手法を使って、ゲノムの比較によって、現代人のゲノムに、絶滅したネアンデルタール人やデニソワ人の遺伝情報の一部が残っていることを明らかにしました。このことは、現生人類（ホモ・サピエンス）と旧人類が交配していた可能性を示唆し、世界に衝撃を与えました。また、2023 年のノーベル生理学・医学賞は、ハンガリー出身でアメリカのペンシルベニア大学のカタリン・カリコ博士らに贈られました。これまで mRNA は医薬品やワクチンへの応用が難しいと考えられてきましたが、カリコ博士らは、人工的に合成した mRNA の構成成分の一部を別の物質に置き換えることで、炎症反応が抑えられることを 2005 年に発表し、これが最近の新型コロナウイルスに対する mRNA ワクチンの開発につながる重要な発見となりました。このような最近の生理学・医学賞の受賞内容から分かることは、社会に直接役に立つような研究もあれば、社会に役に立つかどうかよくわからないが、これまでの分からなかった大きな「なぞ」、疑問を解明し、人類の知識を増やすという研究もあるということであります。しかし、これらの異なる研究には共通点があって、それは、これまで分からなかったことが分かるとか、これまでできなかったことができるとかいった、「新しいことへの挑戦」がそれぞれの研究の基盤にあるということです。「新しいことへの挑戦」これが研究の本質といえます。研究に限らず、これまで分からなかったことが分かる、できなかったことができる、そういったことによる、「わくわく感」、「ドキドキ感」は、事柄の大小によらず、人間誰もがもっている感情です。ミステリー小説が多くの人に読まれるのもこの感情によるものであり、人間の持つこういった感情が科学を大きく進歩させてきたと言っても過言ではありません。

新入生のみなさんがこれから学ぶ大学は、教育機関であると同時に研究機関でもあります。それが高校との大きなちがいです。大学の先生がたは教育者であると同時に、研究者でもあり、常にその専門分野の新しい知識を追求して研究を行っています。したがって、みなさんが、受講する講義、特に専門の講義では、実際にその分野の研究に従事している先生方から直接、最新の研究内容などをはじめ、いろいろなことを教わることができます。また、みなさんは近い将来、卒業論文研究、修士論文研究、博士論文研究などで、そういった先生方から指導を受けながら研究に従事し、先ほど言った「わくわく感」、「ドキドキ感」を味わうこともできます。このことは、ある意味、みなさんが大学に入学したからこそ、大学院に入学したからこそ、経験できる、とても贅沢なこと、幸運なことだと言えます。

それでは、実際、新入生のみなさんは大学でどのような学びをすべきでしょうか。まず、大学で学ぶ知識というのは、高校までみなさんが学んできた知識と違って、知識同士が密で有機的な関連性を持ち、いろいろな場面で使える知識、特にそれが必要とされる場面できちんと使える知識でなければなりません。本学の基本理念である「知と実践の融合」、すなわち講義や本から学んだ知識を、実践を通して生きた知識、使える知識に変えるというのが、まさにこれに該当します。

そして大学での学びの目的の一つは、みなさんが変化の激しい予測が困難な厳しい今の社会で生きていく力を身につけることにあります。専門の勉強に加えて、教養をしっかりと身につけることが重要です。社会に出ると、一般の学校現場で通用する「問題が準備されている」「正解が必ずある」「正解を知っている教員がいて助けてくれる」といった前提はなりたちません。問題は自分で見つけなければならない、正解はあるかどうかもわからない、というのが社会の現実です。そんな中で生きていかなくてはなりません。本当の教養

とは、難しい問題に直面したときに、解決のヒントや指針などを与えてくれる、その人の持っている知識や経験からくる問題対応能力のことです。そのためには、先ずは正しい情報を集め、自分の頭でいろいろな視点から考え、判断し、行動することが大事になります。学部に入学したみなさんの多くが、在学中に卒業論文研究をすることになります。研究は新しい事柄への挑戦ですので、いろいろな問題にぶつかります。それを解決するために、専門のことに限らず、専門外のことまで詳しく調べ、いろいろな角度視点から考え、ヒトと議論し、あれやこれや自分なりに工夫して試行錯誤しながら研究を進める。そういった過程の中から、困難に対処する力、すなわち本物の教養が自然と身につきます。

ほかの人と共同して困難を克服することも学ぶ必要があります。自分だけでは限界があるかも知れませんが、ほかの人と一緒にやることで、その限界を超えることができます。自分の知らない部分、自分ができない部分をほかのひとに補ってもらうことで、困難を乗り越えることができます。人類が今日の繁栄を築けたのは、人類のもつ「想像力」のお蔭だと言われています。この「想像力」で、いろいろな危険を事前に察知して危機を回避し、またその「想像力」で、ほかのひとの気持ちになって考え、ほかのひとの望むことを察知して協力関係を築き、お互いを補いあいながら地球上の生存競争に勝ってきました。したがって、もともと、私たち人間は、社会において仕事をはじめいろいろな場面でほかのひとと協力する、助け合うようにできていると言えます。

また、大学での学びのもうひとつの目的、そしてより重要な目的は、社会で生きる力をつけるだけでなく、もう一歩進んで、社会を支える力、社会を変える力を身につけることにあります。当然、社会に出てからも在学中に身につけた常に学び続ける姿勢を維持し、在学中に得た知識技術をさらに深化発展させることも重要です。こうい

った知識技術で、社会が抱える課題、人類が抱える課題の解決に少しでも寄与することが可能となります。また、すべての事柄について、先入観を排して、広い視野から、きちんと見て理解し自分の頭で考え判断し行動できる力は、社会人として、これからの社会をより良い社会に変えていく力となります。こういった力を在学中にぜひ身につけてください。

一方、事実に対しては常に誠実に、正直に向き合う姿勢も身につけて下さい。大学院に入学され、これから研究に従事されるみなさんにとっては、研究を進めるうえで、このことは特に重要になります。自分の考えに合わない事実を、わざと無視したり、あるいは歪曲したりしては決して正しい結論には至りません。先ずは、正しい方法で情報やデータを集めること、その情報やデータに真摯に向き合い、その意味することを誠実に、正直に読み取ることです。これが研究に携わるものの正しい姿勢です。事実から目をそらしてはいけません。改変、改ざんなどは、もってのほかです。大学院でこれから研究に従事するみなさん、また、近い将来、卒業論文研究に取り組む学部の新入生のみなさんには、ぜひこのことを強く心に留めておいてください。

人生１００年時代を迎えました、大学・大学院を卒業修了した後で、仕事以外の生活・人生があることも決して忘れてはいけません。社会人として人間性を重視した、こころ豊かな生活を送ることが大事になります。そのためには、学生時代から、専門分野の学びだけでなく、それ以外についても幅広く学ぶことで教養を高め、読書をすることで色々な世界観、人生観を身につけ、また、音楽や絵画、演劇など文化芸術にも触れることで感性を磨き、生活を豊かにし、人生を豊にする術も身につけておいて下さい。

これから鳥取大学で過ごす時間が、みなさんにとって自分を磨き、自分を高める、有意義な時間となり、みなさんが、ここ鳥取の地で大きく成長することを、こころより願って、私からのお祝いのことばとします。

令和６年４月６日
鳥取大学長　中島廣光